
of sadness continuing through all eternity

nooth-glim

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Story of sadness continuing
through all eternity

【Nコード】

N1588K

【作者名】

nooth-glim

【あらすじ】

聖なる名前を受けながら、闇に身を染めた少女。
少女がその名を捨てたとき、聖女は、魔女となる……。

一作目が終わらないうちから、もう二作目です。

まあ、気長に見ていて下さい。

なお、この小説には裏切りとかいっばい出てくると思います。
苦手な人は見ないようにして下さい。

プロローグ 聖の終わり、那智の始まり

さくら、さくら。咲きゆくさくら。
春にそろって咲くさくら。
足踏みそろえて咲くさくら。
さくら、さくら。さくら、さくら。

桜並木の道を、少女が歌いながら歩いている。名を、ひつ聖。
その歌は、曲調や歌詞は特に変わったところもない、どちらかとい
うと明るい曲だったが、どこか、嘲りに近いものが感じられた。
おそらくは、その表情のせいだろう。
自嘲や悲しみ、そして深い失意が混じり合った、不思議な暗い色。
しかし少女の瞳は、その表情とは裏腹に、日向に咲くスミレのよう
な、綺麗な紫色をしていた。

さくら、さくら。散りゆくさくら。
風に吹かれて散るさくら。
鳥に摘まれて散るさくら。
さくら、さくら。さくら、さくら。

と、そこまで歌ったとき、聖は、不意に足を止めた。
スミレ色の目が、中空を見つめている。

「ああ・・・そうか。簡単なことだ・・・」
ちいさく、そうつぶせく。

「“わたし”であることが認められないなら・・・」

ふっ、と少女は、笑みをもらす。

・・・いや、その表情は、先ほどまでの聖のそれとは異なっていた。

もう、瞳に映る暗い光もない。あるのは狂気にも近い決意と、確信。

少女はその瞬間に、名を捨てた。

.....

その後、少女は那智^{なち}・・・黒咲那智^{くろさきなち}と名乗る。

それとともに、街では聖人や聖女を狙う、殺人事件が起こり始めた。人々はその事件を、封印されていた魔の者の逆襲だと思い、その犯人を目撃者の証言から“美しき死神”や“禁色の魔女”、“スミレの墮天使”などと呼んだ。

もう、誰にも止められない・・・！！

第一話 転入

ザワザワ・・・

教室のざわめきが、扉の向こうから聞こえてくる。生徒達が、いろいろと憶測をそれぞれ交わしているのだろう。

そのうちの、声の大きい者の会話が聞こえてきた。

「転校生だつて!」

「男かな、女の子かな」

「女子じゃない?かわいい子かな・・・美人だといいけどなあ」

「いやいや、男子かもよ?イケメンだったら・・・約束、覚えてるよね?」

「抜け駆け禁止、でしょ?わかってるつて」

くだらない。

心の中で、そうつぶやく。

しかし、表情には出さない。そんなことをしたら、これまでの苦労が水の泡だ。

ここでは、おとなしい優等生の印象付けが一番にする、そう決めていた。

「ほら、入つて」

担任の先生が手招きをする。

名前は覚ええない。どうせここにいるのは目的を達成するまで。

呼び方なんて、先生で事足りるだろう。

顔を上げる。同い年の人たちが、興味津々といった様子でこちらを

見ている。

その中で、かなり大勢の人が目を丸くしている。

まっすぐで、しなやかな長い黒髪。透き通るような白い肌。顔は完璧に整っている。

手足はすらつとしていてスタイルも良く、誰が見てもかなりの美人の部類に入るだろう。

中でもその深い紫の瞳は、見る者を惹きつける、不思議な魅力を持っていた。

私は、自分の容姿の良い印象を、めいっばい引き出すような立ち振る舞い方を知っていた。

「・・・隣町から転入してきました、黒咲那智といいます。これから、このクラスで一緒に勉強させていただきます。迷惑もかけるかもしれませんが、よろしくお願いします」

静かにそう言うと、ゆっくりと頭を下げる。

長い髪が、ぱさ、と前に落ちる。

前の方で、息をのむような気配がした。

第一印象は完璧、次は・・・

「・・・えー、じゃあ、黒咲の席は・・・羽住^{はすみ}！」

不思議な沈黙で満ちていた教室の空気を振り払うように、先生が唐突に言った。

一斉に多くの視線が一点に集まる。

その先にいたのは、平凡な印象の男子。深緑の目と焦げ茶の髪が、何ともミスマツチだ。

心なしかハートになっているその目が、ぼんやりと中空を見つめている。

「おい、羽住！何惚けてるんだ？」

我に返ったように、その男子・・・おそらく羽住だろう・・・はびくつと体を震わせた。

教室中から、クスクスと笑い声が聞こえてくる。

「な、何ですか？」

びっくりした様子で彼がそう言うと、ますます笑い声は大きくなっ

た。

その中の一人の男子が、大きな声で言った。

「涼太、おまえ見とれてただろー！目がやらしいぞ！」

「なっ・・・！」

羽住の顔が真っ赤になる。

教室中は、もう大爆笑だ。

・・・ばかばかしい。

そう思ったが、もちろん顔には出さない。

先生が何度も声を張り上げて、ようやく少し静かになった。

「・・・えー、黒咲の席は羽住の隣。黒咲、わからないことがあったら羽住に聞け、羽住、黒咲が美人だからって、あんまり変なこと考えるんじゃないぞ！」

その台詞で、教室はさっき以上の大爆笑。

羽住は、さっきよりもさらに顔が赤くなった。

私は、その隣の空いている席に着いた。

「よろしくね、羽住君」

私は、ほほえみながらそう言う。

羽住の顔が、さっきの二回とは比べものにならないぐらい、真っ赤になった。

第二話 私の能力

キーン、コーン、カーン、コーン……

チャイムが鳴った。

今まで席に着いていた人たちが、わあーとこっちにやってくる。

男子も来たかったようだが、私の周りにはいるのは女子ばかり。

みんな、口々に話しかけてきた。

「ねえ、前は隣町のどの学校にいたの？」

「かわいいストラップだね！どこで買ったの？」

「どの教科が好き？私は社会だなあ」

うまく聞き分けられない。

私、聖徳太子じゃないんだけど。質問の内容もくだらない。それ、今聞くようなこと？

そう思ったが、顔には困ったような笑顔を浮かべた。

それを見て、クラスのリーダー格のような女の子が、大きな声で言った。

「ほらほら、そんなにいつぺんに話したら、分からないよ！黒咲さん、困ってるよ？」

そう、彼女が言うと、周りの女の子達は、だんだん静かになった。

「私は、佳奈^{かな}。高橋佳奈^{たかはし}だよ！学年委員長をやっているの。これからよろしくね、那智ちゃん」

そう言ってから、彼女ははっとしたように言った。

「あ、ゴメン・・・那智ちゃんって、呼んでもいい？」

「ええ、いいですよ」

私は、ほほえみを浮かべて、そういった。

それを聞くと、高橋さんは、にっこりと笑った。

「ありがとう！私のことも、佳奈って呼んでいいよ」

これだ。私が、絶対に言われるだろうと思っていた台詞。セリフ

これを了承するわけにはいかない。後々、支障が出てくる。

私は、悲しそうな笑顔を浮かべながら、前から考えていた言葉を口にした。

「ごめんなさい。私は、呼べないと思う・・・。何回も転校してるから、敬語が癖になっちゃってるみたいなんです。慣れてきたら、なるべく普通に話すようにしますから・・・」

私がそう言つと、高橋さんは、残念そうに言った。

「そう・・・だったら、しょうがないか。でも、仲良くしてね」

「ねえねえ！目の色が黒じゃないってことは、【祝福された者】なんだろ！どんな力なの？興味あるなあ」

人の輪から、一人がいきなり身を乗り出してきた。
目が、期待できらきらしているような。

・・・第二段階。

私は、鞆から紫色の雫のような形をしたストラップを外し、右手に握る。

そして、周りを見渡した。

その瞬間、女の子達は、私の前にどっとやってきた。

目をつぶり、念じる。

両手が、淡い紫色に光る。

手を開く。

右手は空。左手にさっきのストラップがあった。

わあっつ

歓声があがる。

「すっごー！瞬間移動・・・テレポートじゃん！」

さっき、身を乗り出して来た人が、言った。

「たいしたことないですよ・・・握った時に手からはみ出ない大きさの物しか出来ませんし、右手から左手にしか飛ばせませんし・・・それに、両手を30？以上離れた状態でも、だめなんですよ？だめだめじゃないですか」

恥ずかしそうな表情を作り、顔の前で手をあわあわと動かす。

「それに、一瞬のうちには出来ないから、厳密にはテレポートでは
ありませんよ？」

「それでも！【祝福された者】だという時点ですごいよ！だって、
そんなにいっぱいいるもんじゃないし」

そう言ったのは、高橋さん。

周りのみんなも、尊敬のまなざしでこちらを見ている。

・・・このあたりには、能力者は少ないのか。
私が生まれたところには、たくさんいた。

まあ、それも当然か。

聖人、聖女クラスの、もしくはそのくらいになると思われる子供を
集めた【教会】という物があつたんだから。

その子供達を教育する【祝福者】も集まるのだから、当然、能力者
は多いだろう。

私は、いろいろなところをまわってきた。
能力者が少ない場所も、たくさんあつた。

でも、さすがに【祝福された者】だというだけで尊敬されるのは初
めて。

これは・・・楽に事を運べるかも。

私は、内心でほくそ笑む。

「・・・黒咲さん？どうしたの？」

坂元さんが、声をかけてきた。
気がつくと、周りの人たちも、不思議そうにこちらを見ていた。

「ああ・・・ごめんなさい。ちょっとぼーっとしてました」

きーん、こーん、かーん、こーん・・・

「授業始まるぞー、席着けー」

みんな、あわてて席に走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1588k/>

Story of sadness continuing through all eternity

2010年10月11日23時20分発行